

これ迄も調査と云つて各方面から皆さん方の生活の有様を調べ大變御迷惑をかけたさうですが、大阪市としてこのやうな實地調査をやるのは始めてあります。これまでは國家自身が主として私共の幸福になるやう色々な方面に努力してきたのですが、近頃それよりも私共をよく知つて居り直接私共に關係のある市町村がこの種の仕事をやる方が一層有効であることが解りましたので、大阪市でも色々な社會事業が益々旺になつて来たのであります。然し私共が一層幸福になるには唯お役所ばかりに一任して居つてもだめで、私共總てが協力努力しなければならぬ。當市も大正十四年春頃から地域も擴張せられ日本一の大都會となるのであります。大阪がより良くなつて私共の生活がより良くなるためには私共は自分の暮しの良くないところを知ると共に爲政者にも知つて貰つてお互に改善に力めなければならぬのであります。それが爲には此度私共のやる社會調査と云つてよくないところを診斷することが必要となるのであります。此診斷は皆さん方が本當のことを置かず私共に云つて下さることによつてのみ出来るのであります。皆さんの仕事は一つとして世の中の總ての人に必要でないものはありません。その貴い仕事に汗を拭ふ暇もなく働いて居る皆さんをみると、實に涙が出る程であります。私共はこの御忙しい時間を剛くことは實に情に於て忍びないのであります。皆さんを、終に本調査のため種々努力を惜まなかつた警部補西村昌道氏その他便宜を與へられた各方面に對して厚く感謝の意を表すものである。

## 第二節 調査地

### 一 位置及地勢

本調査地は一は大阪市南區下寺町三丁目五〇番地、他は南區廣田町八九七番地の全部及び八九八、九〇五番地の一部であるが、兩地の隔りは七、八町であつて、共に市の東南に位し、日本橋筋を東及び西に入つた地點に在る。日本橋筋は大

阪市を南北に貫く幹線で、昔は住吉を過つて紀州に至る要路となつて居つた。

兩調査地は共に汚水の停留せる高津入堀川に沿ふ平地に在るのであるが、東部は天王寺の高地を控へ、そこには安井神社、大江神社、清水寺等の神社名刹が散在して居る。高地は一帶に樹木も多く、市の工場地帯に遠ざかつてゐるため空氣は比較的清潔である。また民衆娯樂場である新世界は近く南部に位して居る。調査地附近は一般に家屋が調査し從來俗に桃木裏、竹屋裏、鶴屋裏、畑の裏と呼ばれて居る細民區域もこの附近に在る。

下寺町三丁目の調査地は北は團坪橋筋、南は愛染橋筋に至る地域に介在し、下寺町通の西側に沿ひ、土地は一般に濶潤の方ではない。下寺町通東側は無数の寺院が連り、二個の消毒會社、天王寺第三、第九小學校、愛染園、天王寺第二小學校も亦この附近に在る。

廣田町は夕日橋の北詰に位し、土地は平坦濶潤で排水は良好でない。東に接して東洋府物消毒會社、西に廣田神社、今宮保育所、徳風校、北には蕨葉第二小學校、南に戒神社を控へてゐる。

### 二 沿革

大江神社の丘上に立つて黒煙の立ち昇る大大阪を瞰下し仁徳帝の昔を想起することの出来ぬものは日本橋筋一帯の過去をも想像することは出来まい。

今の日本橋筋は後に述べるやうな經路を経て發展してきたが、初は道路の兩側に一列に家屋が建てられて居つたもの如く、かつ町名も長町、名護町、名泉町と呼ばれてゐた。長町は一丁目より九丁目迄に區分せられ、五丁目までの間は商家も建ち並び貧民も少なかつたのである。然るに長町の住民と云へば一既に貧民無頼の徒と看做されたため徳川幕末、時の奉行は住民の願を容れて五丁目迄を日本橋と改めた。故にそれ以後長町と云へば六丁目、七丁目、八丁目、九丁目を指稱して来たのであるが、これも亦同一の理由に依つて明治五年當時の府權知事により日本橋と改められ、元の長町九丁は

日本橋五丁に分けられたのである。従つて今日の日本橋三丁目より五丁目までは維新までの長町に當つてゐる。

長町の名稱は名呉より來たと云はれて居る。古き昔はこの地一帯は海濱で人皇第二十一代雄略帝の時吳國より吳織漢織の來朝せる際船を着けてより以來名呉の浦と呼ばれるに至つたとのことである。萬葉集人丸の歌に

住吉の名呉のはまへに駒たてて

玉ひろひしてつゆわすられず

と讀まれ、後醍醐院の歌に

かつらぎの岸のかすみを出る日に

名呉の濱邊の水とくらん

後徳太寺左大臣の歌に

名呉の海のかすみの間よりなかわれば

入目をあらふおきつしらなみ

とあるところを見れば、この濱邊一帯は風景絶佳で都人の旺に節を曳いた所であつたらしい。又大阪生玉邊より住吉に至るまでの名呉の浦を籠めた海岸は大川の岸と呼ばれてゐた。

時の推移と共に此邊漸く陸と化し、名呉の呉も護と書かれるやうになつた。豊公が大坂に築城した時分には海岸には松樹鬱生し名護の松原と云ひ、大坂城外廓積設の馬場はこの松原の一部で積設が補込まれてあつたためかく呼ばれたのである。徳川氏、豊臣氏に代り天下に覇を唱へて後始めて人家建てられ名護の町と稱へらるに至つた。

長町は南海道に至る咽喉に當り、旅人の往來繁く爲に元和五年東町奉行久貝因幡守は此地に旅籠十株を許可した。右十株は瓢屋、分銅屋、傳法屋、河内屋、大師屋、若江屋、坂井屋、伏見屋、輪違屋、練屋で、當時許可せられた旅籠はこの他東海道入口に片町八軒屋八株、西海道入口に曾根崎新地五株、都合大阪全市に二十三株を算へ大阪に於ける旅人宿の嚆

矢をなすものであると。

後寛文年間には放火頻々と行はれ、同六年十二月八日の新町遊廓の出火は二日に亘り、百四十二町八千五百二十七軒を燒失し殆ど全市の四分の一を焦土と化した。市民窮厄甚しく盜賊横行し取締に困難を感じたため之を同宿せしめる者を同罪に處することとした。依つて町奉行石丸定次(寛文三年就職、延寶七年五月死す、年七十五、今日に於ても絞油組合は定次の肖像を傳へ年々祭祀を行ふと)は貧民をして雨露を澆ぎ正業に就かしめると同時に犯罪の取締に便ならしめるため道頓堀宗右衛門町、同立慶町及び長町に木賃宿合計百六軒を許可したのである。

延享元年幕府は大阪川部三郎兵衛、京都青木庄兵衛の願を容れ冥加金を差出さしめ御預地長町を同人等の支配下に置き長町一、二丁目は地子銀一坪に付き二分五厘、九丁目は一坪に付き一分を徵集し、任意に家屋土藏を建設することを許したので漸次長町に家屋が建てらるに至つた。

右の次第で、長町の木賃宿は皆に旅人許でなく、身代を分散して無宿雨乞となり、或は日々市中に日雇となり、荷物持となり搦米屋、酒造屋、絞油屋に働く力役人をも安價に宿泊せしめるために設けらるやうになつたのである。當時長町の木賃宿は三十株あつたが木賃宿營業の獨占權を有し、且無宿者中の盜賊惡黨の取締にも任じた。然るに漸く之等木賃宿以外に市中や端々町續在願の旅籠屋、奉公人入口、煮賣渡世の者又は旅籠屋仲間に加えせぬ小宿に於て無宿者を宿泊せしめるものが續出したので、安政六年長町四ヶ町木賃宿以外にて無宿空人別の者等爲致止宿間敷事と令して之を禁じ犯す者は嚴罰することとした。

然るに木賃宿を長町六、七、八、九丁の四ヶ丁に限るときは搦米屋、絞油屋、酒造屋の所在によつて力役人往復の勞は少くなかつたので、四ヶ丁木賃宿年行司の請願を容れ、力役人足溜所を設けたが、程なく再び力役人足溜所以外に無宿者を止宿させ親請となつて三商に力役人を供給するものが次第に増して來た。之をばうひきと云ふのである。萬延元年ばうひきの營業を禁じ、三商は長町足溜所以外の人足を使用すべからず市在裏借屋等に座敷貸の名を以て無宿者を置く事は固

より禁制たる旨を公布したのである。この命を奉じたのは三商中油屋ばかりで、他の二面は依然として長町以外より力役人を雇入れたため、宿屋渡世の衰微を惹起するのみではなく盜賊惡漢の取締にも差支を來たしたので、文久二年再び戒飾を加へることとなつた。

當時徳川幕府は内政、外交に多端で、漸く頽勢に傾いてゐた。加ふるに物價益々騰貴し、人民困窮し、大部に赴いたならば或は食を得る途もあるだらうと考へ、近國近在より大阪に流入する無宿、野非人甚多く嘉永四年と同様な有様となつた。老幼病者は飢渴に苦み壯者は商家の店頭に集つて米錢を強請し甚しきは窃盜を働くに至つた。依つて長町四ヶ丁目宿等町奉行所に出現して、救小屋を建て老幼病者を收容し、右宿屋に止宿する無宿空人別の者を搦米屋、酒造屋、絞油屋等に周旋せる口入世話料を以て救助費に充當しやうと申出た。町奉行は之を納れ補助銀を下附して其設立を助け、又町々に令して行倒れせんとする難遊人を見れば長町宿屋年寄行司に通じて引渡さしめたのである。

かくて長町の木賃宿は漸次その數を増し從來の旅籠屋は衰微し乞食非人等多くなり惡漢無賴の徒はその數を増すに至つた。當初は宿屋業者の中より年行司二名を選び仲間及宿泊人の取締をなさしめたが、漸く制御することが困難となつたため、十二人の年番を設けたのである。この年番は自ら宿屋業を營み、與力同心の手先をも勤めたが、一方弊害も少くなかつた。強盜、窃盜、殺人等の諸罪人は此年番の手から與力同心に引渡すべきであるのに、此等の惡漢と結託して之を匿ひ又は賭博場を設けて開帳元となるものもあつたが與力同心も當然のこのやうに見逃して居つた。依つて與力同心の下に豪膽強強の者三十名を選び、千日前竹林寺裏に出張せしめ、無賴の徒の取締探偵捕縛の任に方らしめた。この種の出張所は大坂市内に四ヶ所あつて、悲田院町、富田、天滿のそれと共に四ヶ所と云はれてゐた。此竹林寺出張所を俗に塙の内と云ひ、惡徒も之には多少恐れてゐるが、他方又横暴を極めるとの非難も起つた。塙の内は明治五、六年頃迄残つてゐるがその大部は御茶屋の主人となつたのである。

右の如き有様で長町は貧民惡徒の巢窟となり、長町の住民と云へば信用を失ひ排斥せられたため、明治五年に日本橋と

改稱したのは前述の通りである。

維新前後此附近に覇をなした親分を江戸金と云ひ、勢力強大多數の乾兒を配下としてゐた。當時御什置場は富田にあつたが罪人押送の途中若くは平素之等惡徒を中心として騒擾不穩の行動に出るものがあり、爲に名臭橋に警察分署を設けて之に對せしめたさうである。

調査地に沿ふ入堀川は、堀初橋以北は享保十九年の開鑿にかかりその附近に茶屋三十二、株湯屋二株が許可せられたので開けることも早かつたが、堀初橋以南は明治二十六年天王寺水利組合主唱者となり、市の贊同を得て出來たものである。當時兩岸一帯には未だ人家なく、僅に下寺町大江神社前通以北に寺院に關係ある花屋石屋等の人家と、深田橋方面及び合那ヶ辻關慶堂西北に乞食長屋が散在してゐるばかりで、他は一面若荷畑であつた。今日の如く家屋が建てられるやうになつてから未だ間がない。

明治十九年長屋建築規則發布以來、細民長屋の改造行はれ、日本橋筋の細民長屋も改善せらるるやうになり、細民は自然日本橋筋表通より姿を消すに至つた。明治二十七年、八年後より漸次入堀川附近に長屋建築せられ、明治三十年市内の木賃宿が全く廢せらるるに及び、細民は同地方に蟠集し始めたのである。

調査地の一である下寺町三丁目の長屋は明治二十八年の建築にかかり從來普通八十軒長屋と云はれたのは、戸數八十個あつたためである。附近の第三尋常小學校は明治三十六年下寺町四丁目に天王寺第一尋常小學校の分教室として設置せられたものを同三十八年更に今の所に擴張改築したものである。又下寺町三丁目、四丁目の兩消番所は明治十年に建てられたものである。

他の調査地である廣田町は前者よりも開けること遅く明治三十五年天王寺に博覽會開催された以後のことである。昔は一帯に廣田の森と呼ばれ、晝尙追刺等の出没した程で、人家は僅に北は千日前新金比羅神社附近、南は戎神社南通の一通り、西は鐵道線路踏切、東は塙筋の一通りに點々と散在して居つたのみである。現今の家屋は明治四十三年頃の建築にか

かり、東に接して消毒所のある地は元、燗寸會社があつたため調査地は俗に社の裏と呼ばれてゐる。

日本橋筋の益々繁榮するにつれて、細民家は馴逐せらるるに至つたのは如上の通りである。以下明治三十年頃の元の長町、日本橋通の状況を知らんがため横山源之助著日本の下層社會(明治三十二年出版)の一節を引用する。

大阪市にて最も繁華の地なりと稱せらるる心齋橋を過ぎ道頓堀に出候は、難波新地を傍らにし今宮村に通ずる大路有之是ぞ大阪市民にはなが町と呼ばれ常に忌み嫌はるる大阪貧民の住居地日本橋通に候。大阪に初めて來る者にして名護町の事を質せば單純なる市民は孰も月世界の事をきかれたるが如く奇怪なる面色をなじろく、問者の顔を眺め後ち聲をひそめて六、七年前の名護町の状態を語り候が通例に候。七、八年前の名護町と云へば路上を往來するども鼻を蔽はざれば能はざりし程の醜穢なりし由に候へば大阪の如き現金にて物質的なる土地にては貧民街を一種特別視すること寧ろ度に通ぐるは固よりその筈なるべし。然るところ今日名護町に到り見候へば偽善を售りて生活せる連中は切りにその醜を語り候へ共世の進めると共に舊時名護町の面影消え行き清潔法行はれ居り候には是が有名なる名護町かと想像の外なりしに驚かされ申候。

之を當局者に就き相聞き候に明治十四、五年までは名護町の醜狀實に言語に絶えたりしが燗寸會社等の創立してより少しく醜狀を減じ二十一年に至りて警察の整へると衛生の行き届けるとよりして更に面目を改め加ふるに不潔家屋に退去を強制してより一新して今日の如き他と多く異らざる市街とはなりし由に候。されば曩日名護町の總稱ありし日本橋通三丁目より五丁目の開始き四千に近き戸數ありし由なるが現時は三丁目五百、四丁目六百七十、五丁目は六百五十總計三千にだも充たす十年前に比して三分一以上減少す其外觀も較ヶ橋萬年町邊を見たる眼をもて名護町を見れば五丁目の裏長屋に少しく醜狀を示せるのみにて東京とは遙に相違有之先づ今日の名護町は神田芝界隈の裏長屋に比し寧ろ清潔なるは其上に可有之歟。

かくの如く名護町の面目を改めたる警察衛生の當局者が盡力によりしも多かるべけれども寧ろ各種工業の起りし庇護に

よりしもの興りて多からんと思はれ申候。但し名護町の面目以前に比して一變せりと云ふも名護町的貧民が大阪の社會に消滅せりと云ふに非ずしてその半は場所を變じて今日は天王寺村今宮村難波村の各所に移りて第二の名護町を作りつつあり。名護町の一部なる日本橋通り五丁目の路次に入れば路次口廣く家屋は概ね新らしけれや若き女は前垂を下紐に代へ眞裸體になりてさす黒き唇を開き語へるもあり此の暑に恰の破れたるに細帯せる顔眞青なるが悄然路上に立てるあり大阪裏面の消息を尺幅の裡に拘するもの多々見受けられ申候。

右記述の如く日本橋通の面目は一新せられ細民家は表通より後退するに至つたが、悪漢無頼の徒のこれら細民地域を根據として各種の犯罪を行ふことは依然たるものであつた。明治四十年頃でも人力車にて通行中帽子を奪はるとか、玄關の物を盜まるとか云ふが如きは普通のことであつたさうである。

現在調査地の改善事業に多大の努力を拂つて居る西村警部補の就任當時たる大正八年頃でも、風紀衛生状態は到底今日の如きものではなかつた、家屋は破るるままに任せ下水には汚物汚泥堆積し、臭臭鼻をつき、路次内は亂雑に、住民も不潔險惡で犯人の檢舉その他の取締に付き警官を袋叩きにするにもあつたと。

調査地やその附近の居住者は屑物、古物に關聯する職業に従事する者多く、従つて屑物消毒會社や「よせや」と云はれて居る屑物間屋も多數附近に存在してゐる。然し之等の職業に従事するもの及び細民は本市の面目の改めると共に當地域より次第に驅逐される運命にある。現に下寺町通は第一次都市計畫により十二間以上に擴張せられ、同所の調査地は右道路と接觸することになつて居るのである。